意欲の窒息

豊島与志雄

文化が新らしい方向を辿らんとする時、その派生的現象として、社会の或る部分に停滞腐爛を起す。大河の流れの中に、小さな淀みが処々に生ずるようなものである。流れと共に動こうとしても、河床や河岸の一寸した影響のために、一つの岩石のために、そこに淀んでしまう。そしてその中で、動く意志さえも無くなってしまう。文化の進展を欲する者が必然に起す種々の意欲は、何等かの理由による停滞のために、そこで窒息してしまうのである。

そういう意欲の窒息を、少し古いが、ゴンチャロフはオブローモフに於いて描出した。オブローモフは、

数多の農奴を所有する富裕なロシアの貴族である。そして始終彼は、毛布のなかにもぐりこんで、微温と微睡とのうちに時を過している。何かの行動に当面すると、「何のために？」という考えが最初に出てくる。「何もかも面倒くさい。」というのがその結論である。彼は立派な教育を受けて、いろんなことを考えてはいる。然しやがて、何もかも面倒くさくなってしまう。

「高尚な願望の与える歓びも、彼に感じられないのではなかった。人類の不幸も彼は見ていた。時には人間の悲哀を想って、心の底で激しく泣き叫んだ。彼は云い知れない漠とした苦悩と哀愁とを感じた……。温か

い涙は頰を伝わって流れた。全世界に拡がっている人間の不徳、虚偽、罪悪に対して、彼は憎悪を感ずることもあった……。様々な思想が心に燃え起って、頭の中を波のようにうねりまわった。それらの思想は、彼の全身の血を湧きたたせる決断に変ってゆく。彼の筋肉は動きそうになって、緊張し、今や意図が決断に移ってゆこうとする……。彼はある精神力に動かされて、寝台の中で身体の位置を幾度も変える。眼を据えて、半身を起し、手を動かし、感激した眼であたりを見廻す。感激はそのまま眼前に実現されて、今にも英雄的なある行動に変りそうに思われる……。しかし、朝が

過ぎ、夕暮の影が寄せてくると、オブローモフの力は次第に弛んでくる。霊魂の嵐は鎮まってしまう……。血潮は血管の中をゆるりゆるりと流れる。オブローモフは静に寝返りをして仰向になる……。隣家のかげに沈んでゆく華やかな夕陽の影を痛ましげに見送る。—―こうして彼は幾度、沈みゆく落日の影をその眼で見送ったことであろう！」

こうして彼は、農民の状態を改善せんとの意図も、オルガとの恋愛も、凡てを懶く見送ってしまう。

もうここでは、何を意欲するかは問題でない。意欲そのものが必要なのである。窒息した意欲を蘇生させ

ることが必要なのである。

人の意欲を窒息させる雰囲気——他人の労働の上に寄生して不精懶惰な現状に執着する裕福な生活、物質的な快適さのうちに耽溺して、身を動かすことさえも億劫になる生活——そういうものは、オブローモフの時代にだけ、農奴解放以前のロシアにだけ、存在していたものではない。現在にも各種のオブローモフがある。

それになお、現代のオブローモフは、種々の新らしい衣をまとって、吾々の前に立現れてくることがある。

＊

現代の病弊の一つに、神経衰弱がある。その神経衰弱者の最もよいタイプを、吾々はジョルジュ・デュアメルのサラヴァンに見出す。

サラヴァンはまだ生きて動いている。今後彼がどういう風になるか、それは作者デュアメル以外に誰も知らない。がサラヴァンの前半生、「深夜の告白」や「新らしき邂逅」の中のサラヴァンは、神経衰弱以外の何物でもない。

彼は人類に対する愛を持っている。愛情を欲してもいる。人生の温かい調和を夢みてもいる。然し或る人間に当面し或る事実に当面すると、すぐに嫌気がさし

て苛立つ。現実に対する適応性が全くなく、常に孤立感に囚われる。そしてその孤立感のなかで、内省へ内省へと不断に駆り立てられる。内省の世界は無限に拡がる。些細な事件についても、あらゆる仮定が浮び、その仮定からくる想像的苦悩が起る。些細な事柄についても、あらゆる思想が浮び、どの思想を選択してよいかに迷う。そして不断の懐疑と懊悩との昏迷した状態。

「勿論世間には、」と彼は云う、「或る題目について思索しようと考えてその通りにする、ごく賢い恵まれた人々がいます。暗礁の散在する海上に船を操るように、

自分の精神を導くことの出来る人々、本当に思索する人々、即ち思索したいことを思索する人々がいます……。が私ときては、大抵は河床です。私は騒々しい流れを感じます。そしてそれをただ容れてるだけです……。而も常に容れてるわけでなく、氾濫することさえあります。

「私は自ら選択することが出来ません。さ迷ってるあらゆる思想が、私の魂の中に逃げこんできます。私に落ちかかってくるあらゆる種子が、私の中で芽を出します。そのなかで、私自身はどこに在るのか。その群集のうちで、どれが私なのか……。あらゆるそれらの

顔付のなかで、自分を認識し名付け呼ぶことが、どうして出来ましょう。」

統制のないそれら思想の錯雑のなかでは、あらゆる率直な行動は障碍を受ける。そして意外な方向に彼を駆り立てる。彼は愛人の前でも、愛の素振り一つ出来ず、愛の一言も云えない。而も、友人の妻君の腋の下を瞥見しては、その女を犯す場面を想像して、自責に堪えず、そこを飛び出してしまう。思想と想像との区別がなく、現実と仮定との区別がないのである。そして何と莫大な脳力の徒らな消費だろう。

こういう神経衰弱は、現代に往々見受けられる。そ

してそれは何から来るか。漠然とした焦躁からである。漠然とした不安からである。焦躁不安の余りの意欲の痲痺と神経の苛立ちからである。

病原は根深い。それを根治するには、漠然たる焦躁不安の原因をつきとめなければならない。

その原因は必ずしも貧困や失業にあるのではない。サラヴァンは貧困ではあるが饑えてはいなかった。そして或る日彼は、一人の少年が荷車をひきつつ書物を読んでるのを見て、羨望と羞恥とを感じたではないか。

本当の意欲を窒息さして現実から遊離した想念のうちに人を駆り立てる神経衰弱は、社会の各方面に、各

種のサラヴァンを作り出している。が更に、新時代には、生活衰弱者までが吾々の眼に映る。

*

生活衰弱も、近代の病弊の一つである。例を、手近に、竜胆寺雄氏の魔子にとってみよう。

魔子は、「からだのつくりは全体的に華奢だ。そこには近代的な実用の美も逞しい生活のエネルギーも感じられない。あらゆる美がそこでは消費的だ。没落した家系の裔らしいはかない美しさだ。一つはこれはブルジョア的な少女時代の生活環境の影響だが、皮下脂肪の沈澱がないので、見かけはからだも手脚も男の子

のように繊すらと締っているが、発育の華奢な筋肉の中から時折痛々しく骨が覗いたり、要するにじき疲労する非生産的な靭かさがあるだけだ。」そういう彼女が、性情的には、男性的分子ばかり多く、女性的分子は次第に失われていって、「今では申しわけほどちょっぴりと、それが左手の薬指の先だとか、靴の踵だとかに残っているだけで……男の子と変りがなくなってしまっている。」

十八歳の断髪のそういう彼女は、銀座裏の豪華なカフェーの屋根裏に、夫であり愛人である年若い建築美術家と暮している。そして新しい映画を見に出歩き、

卓子大のチョコレートを夢想し、湯上りには真裸で尻振ダンスをやる。妊娠すると、桜ン坊と枇杷とベビーの靴下編みだ。固より妊娠は彼女のうちに神秘な母性をよび覚すが、それも彼女の情感を彩るだけで、彼女の心意を撼がしはしない。そして営養不良と身体薄弱のために胎児剝離の必要に当面すると、涙一滴浮べずに、簡単にそれを承諾してしまう。恐らく「脚を一本頂戴しましょうと申渡されても素直に承諾しそうだ。」——そして彼女の愛人にとっても、彼女の妊娠は滑稽な開闢以来の椿事であり、胎児剝離の手術は一寸した肉体上の事件に過ぎない。そんなことは早くすませて、

海へ行って、牡蠣を喰べて、日光浴をすることだ。「ササバしちゃったところで、それから海だ！　黒くなってこようぜ、二人で。」

　こういう二人は、如何にも近代的であり、一寸見たところ、如何にも尖端的である。然しその尖端は、時代の尖端では断じてない。単に頽廃の尖端であるに過ぎない。社会が処々に作ってる淀みのなかの、一番先の方に、停滞し頽廃して、末梢的な感性だけで生きてるのである。彼等が海へ行って、健康になって、そして帰ってきたところで、やはり同じ生活、意欲のない生活に、立戻るだけのことではあるまいか。

病根はどこにあるのか。没落種族というような宿命的なところにあるのではない。彼等が住んでる銀座裏にネオンサインが跳梁してるように、彼等の生活に感性だけが跳梁して、そのかげに生活意欲が萎微し窒息してるところにある。

吾々はあらゆる意味に於て、強烈なる意欲を、そして潑剌たる生活を、要求したい。そのために、オブローモフを、サラヴァンを、「魔子」の人々を、排撃しなければならない。彼等から来る陰欝なる影と腐爛の空気とは、あらゆる反動や保守よりもなお一層文化の進展を邪魔する。彼等は日の光を遮る瓦斯である。そこに

は生長がなくて、ただ徒らな消費だけがある。

底本：「豊島与志雄著作集　第六巻（随筆・評論・他）」
未来社
１９６７（昭和42）年11月10日第1刷発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志
２００６年４月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。